

父から引き継いだ“高島ちぢみ”の生産から、 ここでしかできない“ものづくり”へ

大学時代に初めてじっくり 工場を見た

高校卒業後の進路を聞かせてください。

大阪の大学で機械工学を学びました。家業である織布工場を継ぐという意識は無く、関心があった分野へ進学したという感じですが。学生時代に初めて家の工場でアルバイトをし、主に機械や工場内の掃除をしましたが、その時、初めてじっくり工場の中を見た気がします。

工場を継ぐことはいつ決められたのですか？

3回生の頃、父から会社を継ぐように言われ、卒業後すぐ兵庫県立工業技術センターで3ヶ月間研修を受ました。そこでは織物の基礎とドビー織機を使ったドビー織り*について研修を受けました。布の切れ端から1本1本糸を解き、どのように織られているのか設計図を描く日々でした。元々細かいことが好きですし、新しい技術を学ぶのはおもしろかったですね。



研修を受けて、父が導入したドビー織機を十分に活かす技術を学ぶことができました。生地から製品の設計図を作れるようになり、現在は、イメージから設計図を作ることができます。新たな製品を生み出せるようになり、これまで注文どおりの物を生産するだけだったのが、こちらからも製品を提案できるようになりました。

日本でしか創れない、日本人 に合ったものづくり

研修後は、仕事では学んだ技術を発揮されましたか？

最初はただ指示されて動くだけでした

ね。それが変わってきたのは、市内外の展示会で、アパレル関係などの営業担当者と話ようになってからです。市内の織物業者で大阪や東京で素材展を開催しており、アパレルやインテリア関係の方と話をする中で、「こんなことはできるか？」と新たな製品への注文を受けるようになりました。工夫しながら対応していく中で、おもしろさが出てきましたし、毎年開催される展示会に向けて、新しく、何か違うものを提案できるよう、製品開発の機会にもなっています。

やりがいを感じるのはどんなときですか？

展示会での出会いから、話し合いを続け、3~4年経過して注文につながるものもありますが、自分が考えた生地の発注が決まるとやりがいを感じます。リスクもありますが、付加価値をつけていくおもしろさと責任を感じます。布製品は最新設備が東南アジアなどにも入り、安い輸入品との競争です。また、真似されるのは当たり前業界です。しかし、大切なのは日本でしか創れない、日本人に合ったものづくりをすることだと思っています。

主にどんな製品を生産されているのですか？

従来の地元を代表する“高島ちぢみ”生地の生産に加え、増えているのは麻製品の注文です。麻布は主に湖東地区（東近江市周辺）が産地ですが、工場は減っています。扱いがデリケートで難しい麻ですが、他所ではできないことをしていきたい方針で、織加工の対応をしています。また、オーガニックコットンの生地生産も手掛けており、完成された生地製品として出荷しています。東京の取引先にはオーガニックコットンに特化した製品だけを販売し、日本でのものづくりにこだわった会社があります。この会社は生地業者からデザイナーに直接提案させてもらい、イメージを話しながら、共同で新たな物を創るおもしろさがあります。最近は、お客様からの注文が変わってきており、ストールやシャツなど、消費者に直接販売する製品に仕上げる場合もあります。

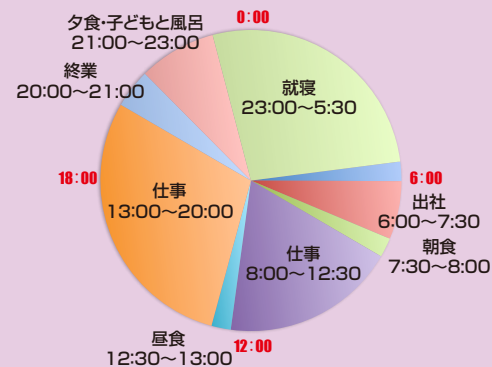


DATA

●プロフィール&高島らしさとは？

1980年、高島市生まれ。現在1歳児の父。休日は家族で市外へ買い物に出かけることが多い。高島は四季をととした風景の変化が観光資源だと思います。

●1日のタイムスケジュール



「自分で織った生地を着てみたい」 そんな若者と一緒に仕事をしたい

織物産業をめざす、若い人へのメッセージをお願いします。

生地づくりを一緒にできる若い方を求めています。細かいことが好きで、ものづくりにまじめに取り組む方で、「生地が好き」「機械が好き」「ファッションに関心がある」「自分で織った生地を着てみたい」そんな方と一緒に仕事をしたいですね。細かな作業の日々ですが、「鍛錬千日、勝負一瞬」。一瞬で決まる勝負のために、日々の積み重ねがあるとと思っています。

*ドビー織機で織られた織り方で、糸の動かし方(織組織)で柄を出した織物。